

## 王小軍さんのお話を聞く会

——王小軍さんと一緒に徐立伝さんの闘いを振りかえる

加藤 陽祐

10月20日、「王小軍さんのお話を聞く会」が開かれた。王小軍さんは、今年11回目となる「中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」に出席するために来広された。安野へ強制連行され原爆で被爆させられた徐立伝さんの孫娘である。祖父徐立伝さんは、安野強制連行の象徴的人物であるためか、会場(広島市西区民文化センター)は満席状態の中、司会・岡原美知子さん、通訳・楊小平さんで始まった。

徐立伝さんは、第二次大戦の末期、国民党軍の兵士だった1944年、日本軍との戦闘で捕虜となり、安野発電所の建設工事へ連行され、大隊長撲殺事件の容疑者の一人として逮捕され広島刑務所に収監中に被爆した。帰国後ガンを患い70歳で死亡された。

「王小軍さんのお話を聞く会」は、王小軍さんをお招きしたこの機会に、被爆者調査、強制連行の実態解明、西松建設との裁判、そして和解へと続く、その後の活動の起点となった1992年の取り組みに焦点を当ててを目的に開催された。



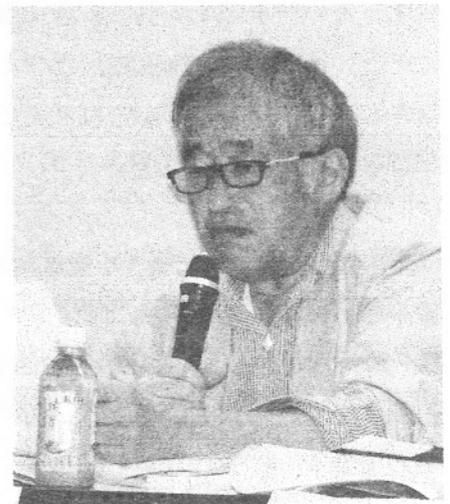
はじめに、映像「1992年訪中調査報告」(20分)を鑑賞した。これは柴田和広さん(中国放送報道部記者)が撮影・編集されたもので、26年ぶりの公開となった。

王小軍さんに先立って、1992年の訪中聞き取り調

査に同行し取材した柴田和広さんと、徐立伝さんの獄中被爆の裏づけ取材に尽力した佐田尾信作さん(中国新聞論説主幹)からも当時の話を聞くことができた。

### 柴田和広さんのお話

柴田さんは、安野への中国人強制連行問題への取り組みがどのように始まったのかというところから1992年の訪中調査へと話をすすめられた。



中国人が安野へ強制連行され被爆死した人がいることは日中友好協会が1950年代に把握していた。1990年から鹿島建設による秋田県花岡への強制連行問題に取り組む広島の川原洋子・牛尾美保子さん(6.30花岡の会)たちも安野への中国人強制連行を調べ始め、生存者の手記の入手を機に訪中を計画した。

こうして、1992年5月、中国山東省青島市での聞き取り調査が行われ、これに同行して楊希桂、于振坤、紀尚喜、徐立伝さんら生存者4人と被爆死した楊希恩の長男・楊世闊、妻・陳秀英さんから取材した。

柴田さんは、生存者4人の証言として、冬にセメント袋を着て、食事はドングリ粉のパンが1個だけなど低劣な衣食住の実態や骨折したときに地元の女性が添え木をして固定してくれたことなど、苦しい収容所の生活で一片の温かさを地元民に感じていた

ことなどを紹介された。これは地元民との交流として私たちが知る最初のものである。

印象深かったのは、被爆死した楊希恩さんの長男・世闘さんの訴え(父が爆心地で被爆死したと聞き、「父の骨を返してほしい。母と乞食をした。母の苦しみを償ってほしい」)や、「これからは日中友好だ」と言う友人に「昔のことが未解決だ。日本の侵略が無ければ……」と抗議したという話で、私自身が92年当時それを知り、胸を衝かれたことが蘇った。

また、徐立伝さんが獄中被爆し、人民日報で韓国人被爆者が補償を求めている記事を見て自分も被爆者であることを自覚したこと、そしてガンに冒されているという証言の衝撃が、当時私達にも強烈に伝わったことも思い出した。

柴田さんは、聞き取りをした被害者宅を示す青島の地図や10人以上が安野に連行された山東省の市・県の分布地図を作成して資料に掲載し、わかりやすい説明をされた。

私は、「徐さんが涙を流して話してくれたのが忘れられない。無念だったと思う」という26年後の柴田さんの想いに共感した。

## 佐田尾信作さんのお話

王小軍さんの来広を機に26年ぶりにこの問題を振り返った佐田尾さんは「感慨深いものがある」と切り出し、次のような話をされた。



地元の日本人から取材して報道したが、その報道を見て、情報を提供してくれた人たちがいた。発電所建設工事中の当時の現場を示す貴重な写真を譲り受けたことや、父親が収容所の監視員だった栗栖薫さ

んが名乗り出て現在も証言していることが紹介された。また、大隊長撲殺事件に関して元警察官中村誠さんの協力が得られて中国人逮捕・広島市内への護送などの貴重な証言によって、徐立伝さんたちが広島市内で被爆したことが裏付けられたと報告された。

また、徐立伝さんは広島刑務所に在監証明を請求(被爆者健康手帳を取得するため)したが、死亡の翌日に在監証明書が届いたこと、徐立伝さんは無念のうちに亡くなったが、他の中国人被爆者に大きな助けとなったと、徐立伝さんが果たした役割に言及された。

そして、徐立伝さんの被爆証言とその裏付けによって、強制連行された中国人の中に生存被爆者がいることが判明し、それは広島原爆被災史を塗り替える意味があったと結ばれた。

参考文献として、『中国人被爆者・癒えない痛苦——獄中被爆の真相を追う』(強制連行された中国人被爆者との交流をすすめる会編、1995年、明石書店)を紹介された。

栗栖さんは中学生の時に工事現場や収容所に入ったりした体験から少年の目に焼き付いた実情を生々しく証言してきた。今や栗栖さんの証言は、その人柄とも相まって私たちの運動になくてはならないものである。

徐立伝さんに関する私たちの知見はほぼこの時のお二人の仕事に負っているのである。そしてこの時の取材調査が基になって、安野への中国人強制連行の真相解明と被害者の尊厳回復の闘いの歩みが始まったといえる。

## 王小軍さんのお話

徐立伝さんの孫娘である王小軍さんと一緒に夫の楢嘉超さんも来広して同席された。お二人は大柄でゆったりとしたお人柄とお見受けしたが、大勢の日本人を前にやや緊張気味だった。王小軍さんは、川原さん(主催者事務局長)との一問一答で、徐立伝さんから聞いた言葉を次のように簡潔に話された。



王小軍さん（中）と夫の褚嘉超さん（右）  
左端は通訳の楊小平さん

#### <日本軍に捕まり日本に送られるまでのこと>

「青島第一体育場に連れて行かれた。コンクリートの床に寝かされ、湿気が高かったので、朝起きると人の影が残った」

#### <安野での衣食住と労働>

「ひと言でいえば苦しかったということ。食べ物も着るものもなかった。セメント袋を服の代わりに着たり布団の代わりに敷いたりした」

#### <事件について>

「長い間いじめられていた怒りが爆発した。警察が来て、木の棒を見せて、どれで殴ったかと一人一人に聞いた。血のつかない棒を差し出すと、最初に殴ったのだろう、お前は死刑だと言われ、後に地下牢に入れられた」

#### <地下牢について>

「原爆のときのこと。牢には小さい窓があって外が見えた。飛行機が飛んできて光った。気を失い、気づいたら廃墟になっていた」

#### <日本から天津に帰ってからのこと>

「冬だったので青島行きの船が出ず、陸路で帰り、45日かかった。帰宅したら妻が30日前に亡くなっていた。船で帰れたら、妻は死ななかったのではないかとずっと残念に思ってきた。当時、射殺されて死んだ、といった怖い話が流れていたの、妻は心配のあまり体調を崩して亡くなったのではないかと思った。

もし自分がもう少し早く帰っていたら、死ななかったのではないか、と思っていた」

「もう一つ残念に思っていたことがあった。祖父は2つの遺骨箱を持って帰国した。二人の名前と住所は聞いていて実際にそこへ行って探したが、家族はどうしても見つからなかった。これも残念なことだったと言っていた」

#### <徐さんはどんな機会に話してくれたか>

「幼いころから話してくれたが、よく覚えていない。覚えているのは、私が高校を卒業した後、仕事をする前のこと。私は家にいてご飯を作っていたので、祖父はよくご飯を食べに来た。その時に聞いた話をよく覚えている。その頃はその話を物語のように聞いていた」

#### <徐さんが体調を崩したのはいつ頃から>

「1991年に頸にできものができた。病院では親知らずか奥歯の奥に何かできたのではないかと言われた。ところが手術をして、親知らずなどではないと言われた。細胞の検査をして細胞ガンと判明した。医者からなぜかと聞かれて、祖父は被爆のことを話した。医者はその方面の専門家ではないので、日本で確かめようとして訪日（補注。検査と治療）を希望した。しかしその後、病状が急変し、2カ月後に亡くなった」

#### <徐さんはどんなお祖父さんだったか>

「やさしいおじいちゃんだった。でもそれは私たちがおとなしくしている時に限ってだった。イタズラをしたりすると、殴ったりはしないが、目を丸くして見る。すると私の体が動かなくなる。そのときはきびしかった。直系の孫でなくても、きょうだいの孫たちにもやさしいおじいちゃんだった」

王小軍さんのお話は私には初耳のことが多かった。家族を気遣い仲間のために尽くす徐立伝さんのお人柄や、また天津港で青島行きの船を待ち、陸路で帰宅したら、「妻が亡くなっていた」という話も私は初めて知った。国民党の抗日戦闘で捕虜になり、安野へ送

られて虐待に耐え、殺人事件に巻き込まれて逮捕、刑務所内で被爆となれば、王小軍さんが祖父の数奇な体験を聞いて当初は「物語のようだ」と感じたのも肯ける。ただ事件のとき警官に「血の付かない棒を差し出した」のは徐さんの抵抗精神の現れとも思えるが、これが孫娘の見た優しいお祖父さんと矛盾はしないだろう。だが徐立伝さんは最後にガンとも闘わねばならず、日本での治療を切望したが果たせず落胆した。徐立伝さんの半生は苦難との闘いであった。その苦難を血縁的感情で受け止める年代になると、物語ではなく歴史事実としても理解されたのだと感じた。

王小軍さんの来広を機に、徐立伝さんの闘いを振り返ることが出来たと思う。王小軍さんは、祖父が日本での検査・治療ができなかったことを悔やむ気持ちや妻の死を自責の念で思い返してきた祖父の葛藤(それも徐立伝さんの闘いの重要部分である)をずっと引きずってきたのだと思う。



柴田さん、佐田尾さん、王小軍さん、3人のゲストのお話が終わって、質疑の時間となり、会場からたくさんの方の質問や意見が出され、16:35に閉会した。

### 被害者の苦しみを忘れない

「お話を聞く会」終了後に行なわれた交流会で、王小軍さんは挨拶に立ち、徐立伝さんが家族に「日本でどんな生活をしていたか見てもらいたい。一緒に日本へ行こう」と話していたことを紹介し、「今回、日本に来られてよかった」と結ばれた。祖父の願いを受け止め、それをやっとなんかすることが出来たという思いが湧いたのであろう。そして帰国の日の朝、吉島町の広島刑務所を訪ね、塀の外ではあるが、祖父が被爆

した地に立たれたのである。

翌10月21日、「安野 中国人受難之碑」の前で開催された追悼式のあと、碑の前で膝をついて徐立伝さんの名前をなぞる王小軍さんの姿があった。立ち上がった王さんは目を泣き腫らしていた。王さんは「一緒に日本に行こう」という徐立伝さんの想いを念頭に祖父に呼びかけ、日本に来たことを報告されたのであろう。これまで「受難之碑」の前に額ずいた遺族たちも、同じ思いで亡き人に呼びかけたのではないだろうか。

毎年被害者の悲嘆を目前に見ながら、何故こんなことが起きたのか、どう慰めるのかを自問し、国家というものの不条理に怒りが湧いてくる。

他国を侵略してその国民を強制連行したことが、どんなに悲惨な結果を招いたか。それを70年間も放置してきた国家とは何か。被害者に謝罪していない企業や国はそれを果たさなければならない。

楊世蘭さんの「私は小学校へ2~3年行っただけ。日本の侵略がなければ……」という叫びが胸を撃つ。

私たちは強制連行被害者の苦しみ、哀しみを忘れないで今後へ活かすことが大切だ。

安野に立つ「受難之碑」は中国人を強制連行したという歴史の証人である。この碑前でみられた被害者家族の悲嘆は見る者の心を撃ち哀しみを共有することが出来たと思う。だがこれからは中国の世代交代も進むので、碑自身はその役割を持つことになるだろう。

被害者の苦しみを心に刻み、かつて強制連行を許した政治・社会状況が再び現出しないようにすることは、現時点では非常に大切になってきたと思う。そのことは徐立伝さんの「日本へ行こう」という思いに通ずるものだと思う。